ジェネラルの男と竜人の娘～戦いの果て～

HATI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジェネラルの男と竜人の娘〜戦いの果て〜

【Ｎコード】
Ｎ０５７６ＢＡ

【作者名】
ＨＡＴＩ

【あらすじ】
とあるＭＭＯＲＰＧに嵌っている男。
カンストしたキャラから切り替えて新しいキャラクターを作成し、育てていた。
起きると見知らぬ場所に放り出され、身体は自分の物ではなく、育てていたキャラクター。
そこから始まったのは、男にとって過酷な物語。
与えられた力は天下無双には遥かに遠く、立ちはだかる敵は強大無比。

寄り添うのは竜の血を引いた少女と、仲間達。
彼の戦いが否応無く幕を開けた。

初めての大地（前書き）

ファンタジー小説となります。

初めての大地

キーボードを叩く硬質な音が閉め切られた部屋に響く。
他にはパソコンのＨＤＤが僅かに煩い程度だ。
１０分もしないうちにキーボードを叩く音は静かになり、それを叩いていた男はゆっくりと体重を椅子の背もたれに預けながら、
ペットボトルのお茶に口を付ける。

「今日はここまでにしとくか。またＭＰ回復剤買い込まないと」

昨日あれだけ買い込んだのに、と男は内心溜息を付く。

パソコンの画面には、２年ほど前に始まったＭＭＯＲＰＧ「ディエス」のプレイ画面と、
彼の操作するキャラクターが移っている。

時刻は既に深夜2時を回っている。
彼は最近派遣の仕事を満了した為、資金に少し余裕がある此処2．3ヶ月はこの「ディエス」の新キャラ育成に費やそうと決めていた。
初期のキャラクターが最高レベルになり、装備も質は上限に来てしまっている。
新しく装備を更新してもバリエーションの違いにしかならない。
その初期キャラクターをプレイ中に特殊職業のキーアイテムを手に入れた為、
朝のうちからその特殊職業を作成し育てていた。

その職業は［ジェネラル］、将軍の職業だ。
ＭＭＯでは余り見かけない職で、ソロが主な彼もその目新しさに加え作成に必要なキーアイテムも手に入ったことで作成した。
レベルは５０ほど。レベル制限ギリギリの装備と回復剤を注ぎ込む事で加速してあるとはいえ、数日で上げたにしては上出来だ。
最高レベルの１５０までは遠いが、ステータスはある程度上がってきている。
これなら暇な間に１００は目指せると男は先ほど落ちた気分を良くし、パソコンを付けたまま布団に入り込む。
明日は次の狩場に行こう。あそこは金銭も経験値も悪くないし……
そう考えながら、男は眠りに落ちていった。
次の日、男の身体はもうそこには無い。

――――――――――――――――――――

「んあ？」
寝転がっている男が陽射しの鋭さに目を覚まし、抜けた声を出す。
「なんだ？」
カーテンで遮られている筈の直射日光に炙られる事の不快さと、疑問。
そもそも男の背中の感触は慣れ親しんだベットのものではない。
男は身体を起こし、周囲を見る。

地面は草が生い茂っていて、近くには端が此処から見えている小さい湖。
周囲を木々が囲んでいる。
森の中の湖、といった印象だった。
「いや、いやそうじゃないだろ」
なんでここにいるのか。いやそもそもここは何処？
そんな疑問がぐるぐると男の中で渦を巻くが、夢だと判断し頬をつねる。
「……痛い」
男の希望は外れ、男は少し迷った後勢い良く後ろに倒れこんだ。
「意味わかんねぇし」
こんな景色に見覚えは無い。
それにこんな鎧着込んだ憶えも……
（鎧！？）
焦って身体を起こし、身体のあちこちを見る。
武装している。剣は直ぐ横に置いてあるし、全身に軽装とはいえ鎧を着ていた。
「こんなもん持ってた憶えも着た憶えもねー――、おいこれ」
まったく身に覚えが無い事が続いていたが、ふと見た剣、それに

鎧に僅かばかり男は引っかかりを憶えた。
つい最近、つい直前まで見ていた覚えが……
「ああ、これ［ディエス］の装備、か？」
［ディエス］の熟練プレイヤーである以上、装備の見た目を見間違うはずが無い。
剣の模様も装飾も、僅かの違いも無く同じだ。
それに気付いた時、男の心臓の鼓動は一気に加速する。
それは恐怖と危機感による物だった。
ドッドッドッ、そう心臓に急かされる。
急いで湖へ駆け寄り、水面に反映された顔を見る。
「お、俺じゃない……、こいつ、ベルギオンじゃねーか」
寝る前まで上げていた自キャラの顔が、紛れも無く水面に映っていた。
数分ほどじっと水面を見つめていたが、しばらくして長い時間を掛けて防具を外し、
ベルギオンは何度か水を救って顔を洗う。
湖の水は澄んでおり、恐らく煮沸や濾過をしなくても飲めそうだ。
防具を外しかなり楽になった後、分からないながらも情報を整理する。
「俺は確かに部屋で寝ていた、よな」

一つ、ここは全く見覚えは無い。
二つ、手持ちの物をひっくり返したところ、金以外は寝る前に持ちキャラ……、
ベルギオンが持っていたものと同じだった。サブだったこともあり大した物は無かったが。
三つ、意識しないと思い出せないが、ベルギオンの記憶が断片的にある。それは俺の操作してきた経歴とほぼ相違なかった。

分かるのはこの程度だ。
そして、この現実感を否定できる材料は一向に無い。

つまり男はベルギオンで、見知らぬ世界に放り出されたってことになる。

その結論に辿りつき、ベルギオンは頭を抱える。

「嘘だろぉ……いや嘘じゃねぇ。意味が分らんぞ」

そう呟いてもこの悪夢から覚める様子は無い。
ベルギオンはガリガリと苛立ちから頭を掻くが一旦思考を切る。

これ以上考えてもどうしようもない袋小路だからだ。

脱いだ鎧や手甲、足の脛当てを取り付ける。
防具のつけ方など分らなかったが手が憶えているのか、思ったより早く付ける事が出来た。

もしこのままなら現状で生きていく事になる。
得てして防具、特に鎧は高額なものだ。

レベル制限の関係でレベルにしては良い程度の物だが、金も無い以上多少苦しいという理由で置いて行くわけにもいかない。

そもそも、人間が居るのか？
もし俺しか人間が居ないとすれば——
そんな想像をしてしまい冷たく血が凍るような感触が全身を舐めた。

——————————！

「なんだ？」

何か今聞こえたか？

そう思いベルギオンは背後へと振り返る。
そうすると、以前では不可能であっただろう距離まで鮮明に見える。
確かこの職は命中補正もあった筈だ。この視力はそれの影響だろうか。

その視力に、モンスターに襲われる少女がハッキリと移った。

僅かにベルギオンは迷ったが、剣を掴み駆け出す。
以前の肉体より遥かに早い動きに意識が付いていかず、こけそうになるが強引に力で傾いた体を振り戻す。
（なんつー身体だよ。明らかに筋肉の量と密度がかつてと違いすぎる）

ぐんぐんと距離を詰めていく。少女は逃げているが、モンスターの方が早い。
その上３体が組織立って追いつめている。猶予はほぼない。
追い立てているのはやけに筋肉の付いた緑色の小人。
見た事は無いが、イメージとしてはゴブリンのやつだ。

ベルギオンはそう判断し、より力を込め速度を増す。

その走る音に少女が気付くほど距離が狭まった時、ベルギオンは軸足となった右足を蹴り上げ、先頭のモンスターに対し膝蹴りを顔面に決める。
走ってきた速度と蹴り上げた力が合わさり、モンスターの首が縦に１８０℃捻じ曲がる。

こいつはやった。そういう手応えだった。

残りは二体。木で作った棍棒をそれぞれ一つ持っている。
ベルギオンが僅かに後ろを見ると少女が倒れている。体力の限界のようだ。

勢いで来てしまったが、喧嘩程度ならまだしも、生死に関わるような戦いの経験は全く無い。
身体能力で遅れを取ることはなさそうだが、走ってきた疲れによる汗とは別の冷たい汗がじわりと額に流れる。

ゴブリン達はいきなり現れて一体屠った男に戸惑いを感じたものの、ベルギオンの覇気の薄さに勝機が高いと見たのか武器を構える。
見た所、二体一というハンデがあるが、あの棍棒を直撃しなければ戦えそうだ。

しかしベルギオンに複数に囲まれた経験は無い。どうなるか分からない。

（先手、取るか……！）

剣を抜き、両手で構える。
握り方は身体が勝手に教えてくれる。
力を込めて、振り上げてから一気に振り下ろす！

重い長剣を振り下ろす事で重い風圧の音が響き、予想以上の力に身体が前に持っていかれる。
剣線上にいたゴブリンは避けようとするが、力を込めて加速のついた剣をかわせず大きく斬れた。

完全に姿勢が崩れたベルギオンの頭を目掛けて、最後のゴブリンが棍棒を振り下ろす。
ベルギオンは咄嗟に地面に突き刺さった剣から手を離し右腕で頭を庇う。

ぐわん、と身体が揺れる。
手甲の防御力が優ったのか、痛みは無いが衝撃で右腕が痺れる。

（くそ、見た目より響くじゃねーかよぉ……）

頭に受ければ致命傷は免れないだろう。
ゴブリンは気色の悪い声で笑い、更に棍棒を振り上げる。

「図にのってんなよくそ！」

その笑いにベルギオンは不快さが優り、咄嗟に右足で腹を目掛け

て前蹴りを離す。
さっきの一撃で僅かにひるんだ事で完全に油断していたのか、蹴りが綺麗に腹に入った。

「ＧｕＧＡａ！？」

腹を蹴られ、胃液と悲鳴を撒き散らしゴブリンは一目散に逃げ出した。
ベルギオンは出来れば倒しておきたいと思ったが、初めての戦いで気力と精神力が疲労したのか、
一気に疲れが出てくる。

ベルギオンは座り込んで乱れた息を整える。
何度かの呼吸で呼吸のリズムが戻った。

「っと、そうだ。さっきの女の子は」

完全に忘れていた事に気付いて焦りつつも、ベルギオンは少女に近づく。
金髪、というよりは茶色の髪の毛。
あどけない寝顔だ。多少汚れはあるが傷などは見当たらず、呼吸も安定している。
素人目には分からないが、問題は無さそうだ。

しかし、余程疲れていたのかすぐには目は醒ましそうに無かった。
仕方ないので、お姫様抱っこで湖の近くまで連れて行く。

ベルギオンは、人が見つかった事に、目が覚めてから初めての安堵を抱いたのだった。

（小さい獣とかもいたし、森から連れてきて正解だったかな）

ベルギオンは女の子を湖の片隅に降ろし、座り込んで湖の水で喉を潤した。

地下水が通っているのか程よく冷えていて、先ほどの疲れが乾きと共に癒えていく。

森には獣の気配はするが、此方に襲い掛かるような危険なものはいないようだ。

（人が居るって分かったのが不幸中の幸いかねぇ。さっきのモンスター見ると差し引きだけど）

先ほど追い払ったゴブリンは普通の獣より知能があり、そして暴力的だ。

誤って動物を殺してしまったときの嫌な感じが心に湧いたが、ああしなければ多分女の子を助けれなかっただろう。

ベルギオンは割り切れたわけではないが、そう思う事にした。

ああいった奴らが居るという事は、日本に居た頃よりもずっと気をつける必要がある。

道端で襲われてしまうような世界だと思った方が良いだろう。

「ゲームならまだしも、これは向いてねぇ……」

真っ当に生きてきたベルギオンの価値観は未だ以前に引きずられているが、

大分引いてきた右腕の痺れで戻される。
初めての戦いで生き延びた事よりも、これからを思うとベルギオンは不安に感じた。

「――ん、ん」

そうしている内に女の子が起きたのか、目が薄っすらと開いていく。
すると勢い良く体を起こし、両手で体を押さえて怯えた顔で左右を見渡す。
襲われる寸前に意識を手放していたから、危機感がまだ強く残っている様子だ。

「落ち着け」
「あ、え、あなたは……、ゴブリン達は！？」
（会話が通じた。内心少し不安だったんだが）
日本語でどうやら通じるようだ。
異国語だった場合間違いなく面倒な事になっていただろうと考えていた為、心配事が一つ無くなる。
「あんたを追いかけてきてた奴らは追い払った。少なくとも今は大丈夫だ」
「そ、そうですか」
女の子の体から力が抜ける。
そこでようやく俺に意識が向いたのか、姿勢を正して俺に頭を下げる。

しかし、ベルギオンを見る目や体が少し硬い。警戒はされてるのかもしれない。

「助けていただいたようでありがとうございます。助かりました」
「運良く居ただけだ。見殺すのもどうかと思ったしな」
「いえ、命の恩人です。何かお礼をさせていただきたいのですが」
(中々義理堅いようだ。いやこれが当たり前なのか？　俺も命の恩人がいたら頭が上がらないか)

女の子はしっかりと此方を見据えている。目は髪と同様、鮮やかなブラウンだ。
服は中世的というか。ロングスカートにシャツ、その上にカーディガンを羽織っている。
しかし、ベルギオンは腕を組んで考え込む。
お礼と言われても困る。まさか金を巻き上げるわけにもいかないし。
とはいえはっきりいって今のベルギオンには何もないに等しい。
人間が生きるために必要なのは……

「そう言われると悪い気はしないな。
お礼か……すまないが食事と今夜の寝床どうにかならないか」
そう言われた女の子はきょとんとした顔をし、先ほどより盛大に力が抜ける。
もしかしてお礼に体でも求められると思ったのかもしれない。
可愛い女の子は好きだが、見た目１４そこそこの娘に手を出すほど道を外れてはいない。
「分かりました。そういう事でしたら、うちの村に来ていただけれ

ばお力になれます」
　俺が変な男ではないと思ってくれたのか、女の子は大分声に張りが出ている。
　しかし村か。色々聞くことができるかもしれないな。
「あ、私はラグル・ロティエといいます。ラグルでいいですよ」
「俺は……、ベルギオンだ」
「ベルギオンさんですか」
　迷った末、本来の名前でなくベルギオンと名乗る。
　幾つか理由はあったが、今はこの名前の方がらしいだろうと判断した。
　ラグルは名前しか言わなかった事を少し不思議に思った様子だったが、大したことではないと判断したのか失礼しますね、と言って手や顔を洗う。
　ずっと走っていたから様子だし汗が気持ち悪いのだろう。
　ここは少し風が強いし、このままここに居たらラグルが風邪を引いてしまうかもしれない。
「何時までもここに居るのもいかんな。少し陽が落ち始めているし落ち着いたら村に行こう」
「分かりました。村へはここから20分くらいで着くと思います」
　顔を洗い終わったラグルはそう言うと立ち上がり、此方です。と案内し始める。
　見た目は華奢なようだが、しっかりしているようだ。

ベルギオンも立ち上がり、ラグルに付いて行き森へ入る。

森を移動がてら幾つか話をしてみるとしよう。

「ベルギオンさんは冒険者の方ですか？」

「ん、まあそんな感じか……、どうして？」

「北の大森林でもこの辺りは奥まっていて、余り普通の人間の方はいらっしゃいません。

それに私を襲ってきた三体のゴブリンを追い払えてましたし」

（北の大森林……、聞いたことはないな）

「普通の人間？」

「はい。北の大森林はエルフ族やドワーフ族、それに私達竜人ような亜人族が主に暮らしているんです」

「竜人……俺には同じように見えるけど」

そう言うとラグルは少しだけ悲しげな顔をしてしまう。悪い事をきいたか。

「血が薄いので。夜目が利く程度です。——濃い血を受け継ぐ人はもう殆ど居なくなってしまって」

「なるほど」

「この辺りは余り危険な獣やモンスターは居ないので、今まで問題はなかったんです。でも最近ゴブリン達が住み着くようになって……」

「あいつ等が出てくるようになったのは最近か」

「はい。長老はロードゴブリンが来ているかもしれないと」

「ロードか。そりゃまずいな」

ロードってなんだ。と思ったが有名な言葉かもしれない。
冒険者で通した以上聞くのもまずいだろうか。
会話の流れから多分かなり強いゴブリンだろう。
「姉が討伐に出ようとしたんですが皆に止められてしまって」
「そりゃ凄い姉ちゃんだな。ただあいつ等は群れてるし一人じゃ無理だろ。
止めて正解だよ。しかしそうするとラグルが襲われたってのはまずいな」
「はい。始めは農作物が荒らされたりする程度だったんですが、数が増えてきたのか最近過激になってきて。でも襲われたのは初めてです」
追われた恐怖を思い出しのか、少しラグルは身を振るわせる。
そのラグルの頭に手を載せ、何度かやさしく叩いてやる。
(甥っ子はこれで笑顔になったもんだが)
「や、やめて下さい！　恥ずかしいです」
とラグルに怒られてしまう。
内心少ししょんぼりした。まあ女の子の頭を気安く触る物でもないか。
しかし元気は出たようで、なによりだ。
「見えてきましたよ」
ラグルに言われて、正面を向くと森を広く切り開いて出来た町が見えてきた。

森の中で作ったにしては中々大きい。少しずつ切り開いてきたのだろう。
家は木で出来てる。それに畑等も手入れされていた。
先ほど川もあったし、人里から遠いみたいだが住むだけなら大変だが悪くない場所なのだろう。
「先に長老に家に案内しますね」
「頼んだ」
ラグルに続いて町を歩く。
余所者のベルギオンにどう反応するのか気になったが、ラグルが居るからか多少じろじろと見られるものの変な視線は感じなかった。
「ここです。長老、いらっしゃいますか」
ラグルはそう言って一回り大きい家のドアを何度かノックする。
「あいとるぞ」
少ししわがれた声が中から聞こえてくる。
ラグルはドアを開けて、ベルギオンを中へと促した。
「失礼します」
「失礼」
中に入ると、材料は竹や木ばかりだが見事な家具が幾つも置かれている。
そこに白い髭を伸ばした男の老人が椅子に座って茶を飲んでいた。

「どうしたラグル。それに其方の男は誰かの」

ジロリと、長老に見据えられる。
この眼、まるで観察されているようだ。
少し癪に障ったが、村の若い娘が誰かも分からない男を連れてきたんだ。
その位はされるものかとベルギオンは勝手に納得する。

「薬草を摘みに湖の近くへ行ってきたんですが、そこでゴブリン達に襲われて……、
このベルギオンさんに危ない所を助けて貰いました」

それを聞いた長老は先ほどの態度を会釈で謝る。

「おお、それはラグルが世話になりましたな。しかしゴブリン共、とうとう我らを襲い始めたか。
――ラグル、お前は一度家に戻りキリアに無事を伝えてきなさい。ベルギオン殿と少し話がしたいのでの」

「分かりました。ベルギオンさんは食事をしたいと言っていたのでその用意もしてきます」
「構わん。芋を煮たやつがあるのでこっちで食事を振舞うとしよう。構わんかなベルギオン殿」

そう意見を振られ、ベルギオンは反射的に頷いてしまう。
とりあえず食事は食べれるようだ。
そうしてラグルは家へ戻り、長老は鍋の置いてある竈に火をつけてベルギオンに茶を振舞う。

「たいした物はないがの」

「いえ、朝から何も食べていなかったので助かります」
ずずっと、茶を啜る。
何かの葉っぱを干した物だろう。
すこし渋みはあったが美味しく飲める。

「さて、まずはラグルを助けていただいた事、感謝に堪えませぬ」
「いえ、運が良かっただけです。襲っていたやつらもそうやばいモンスターでもなかったし」
「それでもベルギオン殿が居なければ命が危うかったようだ。さて、今日は宿の当てはあるのですかな」
「恥かしながら全く」
「ではラグルの家の隣に小屋があった筈。それを使うといい。キリアにも伝えておきましょう」
「キリア？」
「おお、これは失礼。ラグルの姉で家長のキリア・ロティエの事です」
「そうでしたか。屋根のある所なら問題ありません」

シーツなんかはあるみたいだし、野宿よりは全然良さそうだ。

(野宿なんて経験も無いしな)

旅人は珍しいのか、長老は他にも幾つか上機嫌で話を振ってくる。
少しでも情報が欲しいベルギオンにはそれは願っても無い事だ。
年寄りの長話に感謝するときが来るとは思わなかったが。

「ベルギオン殿は冒険者の方ですかな？　商人でも中々此方には来ませんし」
「ええ、旅をしながら移動しています。ただ森で道に迷ったようで

大分深い所まできてしまったみたいです」
「なるほどのう。今は刈り入れ時で人手がおりませんが、手が空いたら道案内をつけましょう」
「良いのですか？　案内人も帰り道が危険では」
「キリアに頼みましょう。彼女なら多少のゴブリンは物ともしません。

大した礼にはなりませんがそれまでは逗留すると良いでしょう」

それは願っても無い相談だ。
金もないし、何をするにもある程度人のいる大きい町に行きたいと考えていた。
森を抜ければ道くらいはあるだろうし、次の指針になる。

ベルギオンはそう考えて、是非とも御願いします。と頭を下げた。
「おや、スープも温まったようですな。お注ぎしましょう」
「御馳走になります」

出されたスープには大きく切った芋が幾つも入っており、付け合せに硬く焼かれた白パンが出された。
こういう村では食料は貴重な筈だ。味わって頂こう。
温かいスープは塩が利いており、パンもスープに漬けるとふやけて食べやすくなる。

自分で思っていたより腹が減っていたのか、ベルギオンはガツガツとスープを平らげてしまう。

満ち足りた気分だった。

「御代わりはいりますかな。ああ遠慮はいりませんぞ。芋は掘れま

すし塩は海が近いので安く手に入ります」
「すみません。ではもう一杯だけ」
よそって貰ったスープを、先ほどより味わって食べる。
生きている感覚を、ようやく味わえた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0576ba/

ジェネラルの男と竜人の娘～戦いの果て～

2012年1月2日01時47分発行